

状況に応じてしなやかに



竹岡裕子

上智大学理工学部物質生命理工学科
[102-8554] 東京都千代田区紀尾井町7-1
教授, 博士(工学).
専門は高分子化学, 有機無機ハイブリッド.
y-tabuch@sophia.ac.jp
www.mls.sophia.ac.jp/~polymer/index.html

保育園に預け始めて数日後、園のベッドで「ひっくひっく」とむせび泣きながら寝ている9カ月の娘を見て、何とも言えない思いを抱いた日から、早12年、その娘も中学生になった。やっと大学での教員生活と家庭との両立に一つの形ができてきた気がするが、手は離せても目は離せない、と思う今日この頃である。

上智大学に入学したときには、まさかこんなに長い間、大学で過ごすことになるとは、夢にも思わなかった。念願の研究室に配属になり、修士課程までは何の迷いもなく進学した。上智大学は女子学生にとって非常に過ごしやすい環境であったし、研究対象の導電性高分子はとても魅力的で、のびのびと研究生活を楽しんだ。人一倍負けず嫌いだったので、学会にも貪欲にチャレンジした。そんな折、指導教員からの勧めもあり、全く考えていなかった博士進学の検討を始めた。ロールモデルが少なく、進学したらどうなるのか想像がつかず、相当に悩み、猿橋勝子先生など、女性研究者の少ない時代から活躍されていた先生方の本を読んでみた。研究に邁進される魅力的な先輩の姿が書かれており、子育てなどで誰しも研究しづらいときがあるので、普通の人よりも頑張っ、早めに業績を挙げておく、などのアドバイスも述べられていた。考えたあげく、進学しなければきっと後悔すると思い、東京大学の博士課程に進学した。進学先の専攻は、同じ建物内に3名しか女子学生がいない環境であった。東大での3年間で大きなカルチャーショックを受けたが、研究者としては男性も女性もなく、自分自身が人としてしっかりしていることが大事なのだと鍛えてもらった気がする。当時の指導教員であった石樽顕吉先生には、将来こういう先生になりたいと、私の目指す教員の形を学ばせてもらったのも、とても大きな財産となった。博士課程では研究や勉学に存分に時間を割ける貴重な時間を過ごすことができ、進学してよかったと心から思うし、進学する際に、先々を心配しすぎていたな、と思う。ぜひ、学生の皆さんにも進学を進路の選択肢の一つとして考えてほしいと思う。今は、女性教員も増え、色んなタイプのロールモデルがあるので、参考にしていても良いかもしれない。

博士取得後、助手として母校に戻り、講師になった年に娘が誕生した。一つ一つ手探りで両立となった。仕事を素早く済ませられるようになったし、子供が急に熱を出すこともあるので、締切のだいぶ前に8割ぐらいまで仕上げておくなど、工夫をするようになった。困ったのは出張である。講演依頼や出張の機会をいただいた瞬間は非常に嬉しく、「やった!」と思うのだが、その後すぐに正気に戻り、「どうしよう、家の方は大丈夫かな、日帰りできるかな」と頭がそちらに向いてしまう。私の場合、夫は長きにわたる単身赴任で、私が出張や夜が遅い場合には両親に負担がかかってしまう。自分が活躍の場を得ることで、家族の負担が増えるということが何ともジレンマであった。子供は親が居なくても育つというけど、どういう子に育つかは親の育て方次第なので、やっぱり目は離せない……など、悩みはつきなかった。同じようなジレンマや葛藤を感じていらっしゃる方がいるのではと推察する。これはきっと子育てに限ったことではなく、介護や自分の健康との折り合いなど、男女を問わずいろいろな事情があり、仕事に力を100%注げないときもあり、個人的な事情に時間を割けないこともある。この状況は少子高齢化で、働く世代の人数が減っていく日本では、より深刻化していくのではと懸念される。日本では、仕事とプライベートの両立が簡単ではない。私の場合、周りの先生方や家族に恵まれ、大小いろんなことに目をつぶっていただいたおかげで、仕事を続けてこられた。でも、日本の大学には世界の流れと逆行しているような状況もかなりあり、日本の大学教員が競争力を維持し、豊かな発想をもち続けるには、改善が必要だと思う。とくに時間的な余白を増やし、心のゆとりをもてるようにすることは、とても大事だと思う。もう一つ言えることは、子育てにしる、介護にしる、同じ状況のものは何一つなく、ケースバイケースで、大変さや解決策が違うということだ。だから、「～すべき」とか「～であるべきだ」といったくくりは極力なくし、各個人が責任は果たしつつも、その状況に応じて、しなやかに対応していくことが大事だと思う。そのときのベストチョイスを重ねて、仕事も私事も両方大切にしていきたい。